

新刊紹介

関周一編

『日朝関係史』

(吉川弘文館、二〇一七年)

深津 行徳

日本列島と朝鮮半島間の交流を、古代から近代まで見通そうとする初めての試み、関周一氏編『日朝関係史』が吉川弘文館から出版された。編者の関周一氏は本書編纂の目的を、日朝関係史独自の時代区分を設定し、アジア諸地域の動向に留意しながら地域間の多元的な交流のなかで日朝関係を捉え直すこと、としている。恒例によって、本書の目次を掲げよう。

I 「古代東アジアの国際関係と交流」 河内春人氏(倭国と朝鮮三国の登場／律令国家群の形成と展開／解体する東アジアとその再編／コラム 渤海の裴瑒と後唐の姚坤―二人の使者からみる国際情勢：澤本光弘氏)

II 「中世東アジア海域と日朝関係」 関周一氏(日麗関係と海商／モンゴルの脅威と高麗・日本／前期倭寇と日麗関

史苑(第七八卷第二号)

係／日朝通交関係と倭人／対馬の朝鮮通交独占から豊臣秀吉の「唐入り」へ／中世日朝関係から近世日朝関係へ／コラム 偽造された国書)

III 「近世の日朝関係とその変容」 木村直也氏(江戸時代の「交隣」関係と対馬藩／コラム 雨森芳洲と「誠信之交」／近世中・後期の日朝関係の変質／幕末の日朝関係―「交隣」の崩壊へ／日朝関係の転回―「交隣」から「征韓」へ)

IV 「近代東アジアのなかの日朝関係」 松田利彦氏(朝鮮の開国／日清・日露戦争／朝鮮植民地支配／コラム 在外朝鮮人)

V 「敗戦・解放から交流へ」 太田修氏(東アジア冷戦の形成と日本と朝鮮半島／冷戦下の日韓・日朝関係／冷戦の崩壊と日韓・日朝関係／コラム ヘイトスピーチと在日朝鮮人)

各章は、統一新羅までを「古代」、高麗―朝鮮王朝中期(柳川一件)を「中世」、朝鮮王朝中期(以訖庵輪番制)―朝鮮王朝後期を「近世」、朝鮮王朝末期・大韓帝国・植民地期(日帝期)を「近代」、植民地からの解放後を「現代」

関周一編『日朝関係史』（深津）

とする、編者によって朝鮮側の政治勢力の変遷を軸に設定された「日朝関係史独自の時代区分」によって構成されている。各章冒頭にはそれぞれの時代の研究の視点・概要が提示されていて日朝関係の「特性」を掴みやすくする配慮がなされ、気鋭の研究者によって執筆された各章には最新の研究成果が盛り込まれている。これらの理解には、武田幸男氏著『朝鮮史（新版世界各国史）』（二〇〇〇年、山川出版社）、朝鮮史研究会編『朝鮮史研究入門』（二〇一一年、名古屋大学出版会）などの併読が必要かもしれない。

本書と同じく「広域史」の視点から、とくに日本の対外関係・国際関係を論じた先行研究として、荒野泰典・石井正敏・村井章介編『日本の対外関係』（二〇一〇—一三年、吉川弘文館）がある。しかしこれは全七冊、本書はその「広域史」のなかの日朝関係史を本文三八六頁と、コンパクトに纏め上げている。

今後、東アジア諸国間の交流・日朝関係史を論じる上で、必読・必携の好著といえよう。

（本学文学部教授）